

所 報

1. 研究室活動報告

1968年7月、小林哲也所長がユネスコ教育研究所長に任ぜられ、休職のまま西ドイツのハンブルグに赴いたため、布留武郎教授が所長に選任された。

教育研究所談話会は、下記のように行なわれた。

1968年11月26日

「日本と米国における青年の自己像のクロスカルチュラル分析」

原 喜美助教授

A. 教育哲学研究室

ICU 教育哲学研究会は下記のように例会を開催した。

第8回 1968年11月30日

「ロバート・ウーリッヒとジョン・W・ガードナー ——現代教育哲学の一側面——」 讃岐和家助教授

部門別のスタッフ各個人の研究活動状況は下記のとおりである。

a. 教育哲学

日高第四郎教授（客員教授）

客員教授として大学院において、教育哲学の基本原則に関する講義を担当した。

小島軍造教授（兼任教授）

1968年4月より、兼任教授となり、大学院博士課程の指導に当たっている。主たる関心は教育的現実には君臨するカント倫理の要求を検討すること、他は、現実の相争う問題自身の中から、それらをコントロールする原則を見つけようとするプラグマティックのゆき方を追求して見ることにあった。第一の関心は、カントの「道徳法則」の与えられ方に主たる関心を置いて『実践理性批判』を検討してゆく、という仕事になった。後者は、「教育と社会」あるいは、「社会企画としての教育」などのテーマのもとに、G. Counts, J. L. Childs, R. Niebuhr, J. Dewey, K. Mannheim, K. R. Popper 等の思想を検討する仕事になった。

学会関係：10月20日、21日、早稲田大学で開かれた日本デューイ学会第12回大会で、「現代とデューイの思想的遺産」というシンポジウムに参加し、「デューイと理想主義」という題で報告を行なった。10月26日、27日、慶応義塾大学で開かれた教育哲学第11回大会で、一研究部会の司会をした。

寄稿：1)「民主化と道徳」

『現代教育研究(14)・道徳教育・』 日本標準テスト研究会 1968年8月。

2) 上武大学論集I (1969年3月刊) に「民主化と倫理——“状況に生きる”ことの意味——」、および同論集II (1969年10月刊行予定) に「プラグマティズムと理想主義——人間の月面到着と哲学——」を執筆。この第2の論文は、デューイ学会での報告の延長線上にあるもので、デューイにおける社会の建直しのための哲学という考え方を追求し、哲学と社会的現実との関係の問題を検討し、プラグマティズムの批判的研究を意図したものである。

讃岐和家助教授

昨年度の研究活動を発展させて、1950年代におけるアメリカ教育思想の展開という主題を50年代におけるアメリカ社会の変貌との関連において研究した。また、この主題との関連において、千葉大学の白田貴郎教授を代表者とする文部省科学研究費による総合研究「アメリカ近代倫理思想研究」に参加し、「ウィリアム・ジェームズ」を担当した。

1968年10月26日、慶応大学で開催された第11回教育哲学大会において、「ロバート・ウーリッヒの社会哲学と中等教育観」と題する発表を行なった。なお、同年11月より教育哲学会の機関紙「教育哲学研究」の編集委員に選任された。

著作としては次ぎのものがある。1) IDE 大学教育国際資料第17号 (1969年2月) にW・C・ジョーンズ編、『高等教育をすべてのものには是か非か』(1965)の文献紹介を発表した。2) 同年3月、ジョン・W・ガードナーの『優秀性——平等と優秀の両立は可能か』(1961年)の翻訳を理想社より刊行した。

また、金子武蔵編『倫理学事典』(弘文堂刊行)の改訂版出版に際して、さきに寄稿した「新約聖書の倫理思想」、「教育学・教育科学」、「西洋近代の道德教育」第6項目を改稿し、新たに「家族」を寄稿した。(1969年内に刊行の予定)。

川瀬謙一郎助教授

前年に引き続き、(1) 大学における教養の理念について検討を加えるとともに、(2) 歴史のうちにあらわれた教育理念を社会層との関連において理解しようとする試みを行なっている。

また、金子武蔵編『倫理学事典』の改訂版出版に際して、さきに寄稿した「宗教改革の倫理思想」、「民族」の項目を改稿し、新たに「職業」の項目を寄稿した(1969年内に刊行の予定)。

磯田一雄講師

年来の課題である共同研究「戦後日本の教育課程の改革」をすすめるかたわら、「授業研究」にも関心をよせて来た。前者は1968年度内に完成・出版の予定であったが、共同研究のため東大紛争の影響等でかなり進行がおくれている。後者については、1968年10月に盛岡市社陵小学校で開かれた「全国授業研究協議会」第5回大会に助言者として参加した。

本学報の本号に掲載したものその他、年度内にまとめた論文は次のとおりである。

1) 「子どもの生活と授業」, 細谷俊夫他編, 「現代教育研究」第9巻, 「授業の研究」, 日本標準テスト出版社, 所収。2) 「宗教と教育」, 柴田義松編, 「教育科学の新研究」, 明治図書(印刷中), 所収。

黒田 瑛助手

1963年以來教育学科および教務員(1968年より教務課長)として勤務していたが、一身上の都合により本年3月末をもって退職した。

b. 基督教教育哲学

秋田 稔教授

1968年10月28日と29日, 日本基督教学会第16回学術大会が玉川大学において行なわれたが, 主題「キリスト教教育の理念」のシンポジウムに発題者として九州大学の石井次郎教授と共に参加した。その際の発題論文「キリスト教教育の理念——対話の精神・人間教育を生かすもの——」は「日本の神学」第8号に掲載される。

『キリスト教』(日本倫理学会編, 理想社1968年10月発行)に「預言者の歴史的実存自覚」を執筆掲載した。『聖書の思想——キリスト教思想の根柢——』(塙書房, 1968年11月発行)を出版した。

金子武蔵編『倫理学事典』の改訂版出版に際して, さきに寄稿した「旧約聖書の倫理思想」, 「教育」, 「道德教育」他二項目の改稿を行なった(1969年内に刊行の予定)。

なお, 研究主題との関連において, 千葉大学の白田貴郎教授を代表者とする文部省科学研究費による総合研究「アメリカ近代倫理思想研究」に参加し, 「ラインホルト・ニーバー」を担当した。

関屋光彦講師(非常勤)

1968年度は, 本務である東海大学文学部において文明学科ヨーロッパ専攻課程の指導を担当し, また, 本学報第13号で報告した深大寺学寮の運営指導をも行なってきた。「日本の近代化におけるキリスト教の役割」を研究の主題としてとりあげ, 日本基督教学会においてこの主題に関する報告を行なった。

c. 教育思想史

長 清子教授

1968年7月4日~19日, スエーデンのウプサラ大学において開催された世界教会協議会(World Council of Churches)第4回世界大会に adviser として招かれ出席した。大会後, ICUの教養学部長就任期間の責任上, 新しい大学像を求めての大学制度の改革の問題, ことに, クラスタ型(cluster type)大学の在り方, inter-disciplinaryなカリキュラムの立て方, 研究と教育の方法などの課題についての視察のめた, イギリスの新しい大学の一つとしてのサセックス大学(Univer-

sity of Sussex) やクラスター型大学の典型と目されるアメリカのクレアモント大学 (Claremont College), をはじめ, ハーバード大学, カリフォルニア大学, その他を訪ねた。また, 前シカゴ大学総長で現在 Center for the Study of Democratic Institutions の所長として, 今日の大学問題をとくに深い関心をもって研究している, ロバート・ハチンス博士 (Dr. Robert Hutchins) をサンタ・バーバラの同研究所を訪ね, 語りあいの時をもった。

ICU とカリフォルニア大学との間にグループとして学生を交換しようという新しいプログラムを ICU における国際的的使命達成の新しい試みとして提案していたのであるが, サンタ・バーバラ (Santa Barbara) にカリフォルニア大学海外教育センターを訪ね, アロウエー所長 (Mr. Allaway), その他のメンバーたちとこの計画の具体化のため協議した。

著作活動としては, 以下のものがある。岩波講座『哲学』第二巻「現代の哲学」に論文「『信仰』の非宗教的把握の試み——内在化と革新——」, 『日本のこころ——その代表的人物』(毎日新聞社)に「内村鑑三——独立的キリスト者の誕生」, その他を執筆した。

d. 比較教育学

小林哲也助教授

1968年7月以降ユネスコのハンブルグ研究所長に就任したため休職となった。(なお, ハンブルグの仕事をさらに続けるため, 1969年7月5日付けをもって退職となった。)

デューク助教授

1968年以降, 休暇でロンドン大学において研究に従事した。

B. 教育心理学研究室

1968年度は研究室の移転があり, 若干の人事異動があったほかは, 比較的平穏な一年であった。4月に非常勤助手として欧陽効平さん (ICU 第12期生) が参加し, 鈴木・山本両助手とともに学生の指導や研究室のこまごまとした仕事を手伝って下さることになった。9月の7日~10日には伊豆天城山荘において恒例の心理学夏季セミナーが開かれ, 古畑・星野・鈴木・山本・欧陽ら教育職員と学部学生15名のほか, 先輩として米国留学から帰国した大森晶夫君 (第9期生, 法務省東京少年鑑別所勤務) と, 岩瀬純一君の二人が参加した。年が明けて, 2月上旬に原一雄助教授は生理心理学研究に従事するためプエルトリコ・サンファンにある生理学研究所に出張された。期間は1970年秋までの予定である。また, フィリピンに出張しておられた都留教授が任務を終え, 2月16日帰学された。

3月には研究室主催で卒論発表会を行なった。ICU Ψ (心理学研究会) は, 大

体毎月例会を開き、外部から講師を招いたり、会自体の問題を話しあったりした。各研究室員の研究や活動状況は次ぎのとおりである。

都留春夫教授

1967年7月に外務省の依頼によりフィリピン国ケソン市のアテネオ・デ・マニラ大学に日本研究講座主任として出張した。'68年度も引き続き同大学客員教授として勤務し、1969年2月16日に帰国した。

I. アテネオ大学で担当した授業は下記のとおりである。

- 1) 日本の教育の歴史 2単位 1967年度第1学期(7月~11月)
- 2) 日本の教育制度 2単位 1967年度第2学期(11月~3月)
- 3) 現代日本の教育の問題 2単位 1968年度第1学期
- 4) 日本研究入門I, II 各3単位 1968年第1, 2学期
- 5) 日本の教育の歴史 2単位 1968年度第2学期

II. 学会発表として、フィリピン心理学会第1回大会(1968年4月)において、「ラボラトリー・トレーニング方式を応用した看護婦の現職訓練について」を発表した。

III. その他の活動として、以下のものがある。

(a) 講義。1)「グループについて」(University of the Philippines において)。2)「日本の伝統的文化」(University of the East において)。3)「日本文化の伝統」(Far Eastern University において)。4)「日本の教育の現状について」(Philippine Christian University において)。5)「日本の教育の歴史」(St. Era Marist University において)。

(b) ラジオ放送。1)「日本文化について」。2)「日本の教育について」

(c) 研修指導(Tグループ)。下記において行なった。1) East Asian Pastoral Institute, 2) Planned Parenthood Movement Workshop (3回), 3) Seminar on Training Methods and Strategies on Family Health, および 4) フィリピン心理学会研究討論会。

(d) 訪問。本学教養学部長の依頼をうけて東南アジア各国の大学を訪問し、学長、副学長、学部長、アジア研究所長、日本研究担当教授の方々と会見し、研究者・学生などの交換に関する協力の方法について懇談し、帰国後、報告書を長清子学部長に提出した。訪問した国および大学は次ぎのとおりである。

香 港	香港大学, および中文大学
タイ国	タマサト大学, およびチュラロンコン大学
マレーシア	マラヤ大学
シンガポール	シンガポール大学, および南洋大学
インドネシア	インドネシア大学

(e) 会議。1969年3月10日より15日まで、香港大学アジア研究主催の「東南アジア諸大学における日本研究」に関する会議に顧問として出席した。

星野 命助教授

I. 研究活動

1) 前年度に引き続き、6か国共同研究“A Cross-national Study of Socialization of Children into Compliance System”の調査結果をまとめるため、Dr. Robert W. Avery (本学社会学 visiting professor) の協力を得て、英文199ページの論文を完成した。これはスタンフォード大学の Dr. Robert Hess のもとに送られて近く公刊される。2) 前年度からのもう一つの共同研究は、総合研究「家族関係と人間形成」(代表者：依田新日本女子大教授) の分担研究「家族関係の社会的文化的背景」であり、前年度に終了した調査結果に基づいて分析考察を行ない、10月3・4日に開かれた第10回日本教育心理学会総会において発表した。3) 精神障害者に対する社会のいろいろなグループの態度に関して調査研究を行なった結果は、3月27・28日長崎で開かれた日本精神神経学会の一般演題ならびに10月19～20日の第4回日本臨床心理学会大会のシンポジウム「異常性を規定する文化的要因」において他の研究者と連名で発表し、また南博・相場均・なだいなだ共編『病める心と社会』(野火書房刊)に掲載した。

II. 著作

1) 「人格の社会的文化的背景」佐治・水島・星野共編：臨床心理学講座第1巻『臨床心理学の基礎』第3章、77～120頁。2) 「わが国における臨床心理学者の実態」玉井・片口・小島共編：臨床心理学講座第4巻『臨床心理学者の現状と活動』122～164頁。(佐治・山本両氏と共同執筆。) 3) 「日本人の性格構造——「甘え」をめぐって——」放送朝日170号。8～20頁。4) 『性役割の獲得とその指導』児童心理、22巻12号、25～35頁。5) 翻訳として、オルポート『人格心理学、下』(誠信書房刊)の「第IV部パーソナリティの評価」がある。その他、『教育心理学新事典』(金子書房刊)、『家庭教育指導事典』(帝国地方行政学会刊)、『キリスト教教育事典』(日本基督教団出版局刊)に分担執筆し公刊された。

III. 学会出席

上記日本教育心理学会総会、日本臨床心理学会大会のほか、7月22～24日に開かれた第32回日本心理学会大会に出席し、シンポジウム「モチベーションの諸問題」において「社会的動機：その実現と社会的文化的要因」と題する発表を行なった。また東京で9月3～7日に開かれた第8回国際人類学民族学会議に参加した。それに先立って箱根で開催された“Cultural Change and Psychological Adjustment”に関する共同討議を傍聴した。学会以外の活動としては、講師として立川市青年教養講座に協力し、また基督教学校教育同盟の教育研究委員として委員会および同盟

総会に参加し、また講師として関東地区中学高校新任教師研修会に協力した。

IV. その他の活動

都留教授の海外出張後、チーフ・カウンセラーとして ICU 学生の相談を担当した。また三鷹市教育相談所の指導顧問として毎月2回同所相談員ならびに研修員の指導に当たった。

古畑和孝助教授

I. 研究テーマ

教育心理学における基礎的研究，殊に対人関係の心理。

II. 学会発表等

1966年より，文部省科学研究費による総合研究「家族関係と人格形成」の分担研究者の一員として参加。その成果の一端は，1968年7月，日本心理学会第32回大会（於・同志社大学）において，鈴木百合子助手（69年度は非常勤講師），田代（武岡）千枝子（本学・大学院卒）と連名で，「均衡理論の適用による母—子の態度に関する研究（第1報告）」と題して発表。（同大会論文集 465～467頁に記載）。なお，その大要は「教育研究」本巻に掲載予定。次いで，1969年8月，同学会第33回大会（於・国立教育会館）において，同一題目で，その第2報告を，鈴木・武岡と連名で発表予定。2）上記と関連して，「青年における対人態度認知の機制（その1）——均衡理論による吟味（予備報告）」を，1968年10月，日本教育心理学会第10回総会（於・日本女子大学）において発表（同・論文集 46～47頁に記載）。次いで，1969年10月，同学会第11回総会（於・広島大学）において，同一題目で，その第2報告を——副題は「友人関係の場合——均衡理論による吟味」——鈴木と連名で発表予定。3）1968年度，同上試験研究「道徳性発達の心理学的基礎」の分担研究者の一員として参加。「準拠集団道徳性の発達，およびその変容」の題目の下，都立大学・上智大学および本学の研究協力者とともに，基礎的研究を続行中。4）本学布留武郎助教授の「青少年に対するテレビの機能・逆機能」に関する機関研究の一部に，分担研究者の一員として参加。

III. 著作

〔A〕1968年以降既刊のもの（上記のものを除く）。1）「集団のふんい気」。飯田芳郎・他（編）「生徒指導事典」第一法規，216～220頁。2）「集団的創造」。小口忠彦・他（編）『学習の構造』（現代教育研究・第3巻）日本標準テスト研究会，91～98頁。3）「学校における人格形成」。依田新・他（編）「人格の形成」（大河内・海後・波多野（監修）：教育学全集，第11巻）小学館，156～207頁（沢田慶輔と共著）。4）「集団内協同と集団間競争」。「学級経営」4巻，5号，76～82頁。5）村上俊亮・他（編）『家庭教育指導事典』（帝国地方行政学会）の編集協力者および数項目分担，（353～358；401～404；579～584頁。）〔B〕未刊のもの。1）印刷中乃

至出版社の手許にあるもの、7篇。2) 進行中乃至準備中のもの、3篇。

ヘルムート・モーズバッハ助教授

I. 研究活動としては、国際人類学民族学会議の第8回大会(68年9月、於東京)において、岡木千恵さんと共同で下記の報告を行なった。“A Cross-cultural Study of Future Expectations and Aspirations among Adolescent Girls”。その大要は、日本民族学会の民族学研究、第33号 292~293頁に掲載された。

II. 著作としては、本学報本号に掲載の“Future planning”があるほか、下記のものがある。“The University Training of Psychologists in Germany”, (with G. Morsbach), *Japanese Journal of Psychology*, 1968, 39, pp. 97~101, 脱稿したものとして、次ぎのものがある。“A Cross-cultural Study of Achievement Motivation and Values in Two South African Groups”, (*Journal of Social Psychology*, 69年末に刊行の予定)。“Auto- and Hetero- stereotypes in Two South African Groups”, (*British Journal of Social and Clinical Psychology* に投稿)。

鈴木百合子助手

I. 研究活動としては、1) 本学古畑助教授と共に、「均衡理論の適用による母一子の態度に関する研究」を前年度に引続き行なっている。2) また均衡理論を、青年における友人関係にも適用し、女子大生を対象に調査を行ない、それぞれ分担して分析的研究を進めている。3) 他方、都立大学の辻正三教授を代表者とする文部省科学研究費による試験研究、「対人態度測定法の比較研究」に参加し、対人態度尺度の検討を行なってきた。

ICU 教育心理学研究室には1966年4月より3年間勤務したが、1969年3月をもって非常勤助手を辞することになった。この間1967年4月より1968年9月までは東京女子大短大の非常勤講師を兼務してきた。

II. 学会発表は、日本心理学会第32回大会で古畑助教授および大学院生田代千枝子と連名で「均衡理論の適用による母一子の態度に関する研究(第1報告)。(その3) 母一子の態度の類似度と母一子の親近感情の関係」と題して発表した。

III. 著作としては、1969年1月に金子書房から発行された教育心理学新辞典に社会心理の数項目を担当執筆した。またICU 教育研究第14号に、古畑助教授、松野(東)前助手らとの共同研究「均衡理論の適用による母一子の態度に関する研究」の詳細をのせ、その一部「予備調査の検討：母一子の共通の関心事および母一子の態度・意見の類似と相違」を執筆した。

山本勝美助手

I. 研究活動 1) 三歳児グループの遊戯療法を約30セッションにわたって行ない、その発達・変化を検討し、要約した。2) 東京臨床心理研究会による共同研究

「イメージ・テスト作成」の試みを行なった。3) 都立大学辻教授を中心とする、文部省科学研究費による試験研究、「対人態度測定法の比較研究」に参加し、イメージの側面から、対人態度に関する検討を行なった。4) Morsbach 助教授夫妻の研究「Future Planning—A Comparative Study of Japanese and American Boy」(本学報本号に掲載)に共同研究者として参加した。5) 臨床活動としては、上述の三歳児および自閉症児の母親グループ・カウンセリングのほか、個人ケースの心理治療を行なった。また、保健所心理判定員として、三歳児健診を担当した。

II. 学会発表 1) 第32回日本心理学会大会において「同調・独立・反同調に関する一研究」を発表した。2) 第4回日本臨床心理学会大会において共同研究「イメージ・テストの試み(II)」を発表した。3) 第10回日本教育心理学会大会に、「イメージ・テストの試み(I)」の共同研究者として出席した。

III. 著作 1) L. Blank: “Psychological Evaluation in Psychotherapy”の第7, 8, 9章の翻訳を完了した。2) 臨床心理学研究 7巻, 3号に「米国の臨床心理学者の活動および諸学派の現況について」を掲載した。3) 本学報本号にモーズバッハ助教授夫妻との上述共同研究を掲載した。

C. 視聴覚教育研究室

文部省科学研究費による機関研究「青少年に対するテレビの機能と逆機能」第2年度目に当たる本年度は、昨年度の三多摩地区の高校生に引き続き、同地区の公立小学生、中学生それぞれ800名を cluster sampling により抽出し、直接的、投影的質問紙法および諸テストによる調査を行なった。さらに、前年度の被験者の中から450名を抽出し、一年間の間隔によるメディア行動の変化等を調べるための再調査を行なった。本年度の調査に関しては、現在のところ集計中である。高校生を被験者とする昨年度の調査は、メディア行動と関連する社会学的、心理学的諸特性を量的にとらえて多次元解析を行ない、その結果について次ぎの二つの学会で発表した。1) 日本教育学会第27回大会(於南山大学, 1968年10月4日: 発表者・布留, 中野, 平田), 2) 日本新聞学会秋期大会(於慶応大学, 1968年11月16日: 発表者・布留, 中野, 古畑, 鈴木, 平田)

布留武郎教授

上記文部省機関研究の計画, 調査用具の作成, データの解析方法等について中核的活動を行ない, 上記の学会で発表した他, 平田助手と共同で次ぎの論文をまとめた。「絵画投影法によるテレビジョンのイメージについて」, ICU教育研究, 第15号(69年度発行予定)に発表の予定。

また, 現在教育社会学会評議員, 視聴覚教育学会常任理事, 同学会機関誌「視聴覚教育研究」の編集責任者, 日本放送教育学会常任理事, ミュンヘンにある Society

for the Promotion of International Youth and Educational Television の国際諮問委員会委員等をつとめている。NHK総合放送文化研究所主催のシンポジウム「放送と人びとの嗜好」(1968年11月6日)の発題者の一人をつとめた。

中野照海助教授

研究テーマは、1) 教授=学習過程における映像の機能(NHK研究奨励金による、東京都放送教育研究会との共同研究第2年次)、2) 青少年に対するテレビの機能と逆機能(布留教授を代表者とする機関研究第2年次)、3) 大学における教育過程・教育方法に関する研究(国立教育研究所々員その他による総合研究第1年次)。機関研究の発表は上記のとおりであるが、第4回日本教育方法学会大会のシンポジウム「教授の合理化、効率化の諸問題」で提案を行なう。

1968年以降執筆した出版物は、明治図書刊『視聴覚教育新辞典』(編集および項目分担)、明治図書刊『講座放送教育』第4巻第IV章「言語領域の指導と放送の役割」、黎明書房刊『自主学习講座』第2巻第II章「教授過程の機械化」、金子書房刊『教育心理学新辞典』のうち、「視聴覚教育」関係の項担当、文部省刊『教育と放送』第4章「諸外国における放送と教育」。その他、雑誌「放送教育」、「近代教育」、「英語教育」、「現代英語教育」に寄稿した。

前年度に引き続き、日本視聴覚教育学会常任理事、同紀要編集委員、日本放送教育学会理事、同常任委員、日本語学ラボラトリー学会運営委員、その他の機関に役員または委員として参画した。

平田賢一助手

布留教授と共同で「絵画投影法によるテレビジョンのイメージについて」と題して本学報(ICU教育研究)の第15号に発表の予定である。また、布留教授の指導のもとに上記文部省機関研究の調査の実施と集計にたずさわって、その結果を布留教授や他の研究者と共に上記の学会で発表した。(平田助手はその後69年7月にCanadaのWaterloo大学よりresearch assistantshipを得て、同大学博士課程に入学した。)

D. 教育社会学研究室

本学では、教育社会学研究室は現在直接的には社会科学科に所属するが、そのフインクスの性格から、この「教育研究」にもその研究活動について簡単な報告を掲載する。

3年前、日本教育社会学会の生みの親の一人として多年本学において貢献された西本三十二教授が、専任教授の職を退かれ、帝塚山学院大学学長に就任され、本学においては客員教授となられたため、また教育社会学を担当する原喜美助教授が暫く海外にあったため、一時研究活動が停滞し、現在まさに再建・再編成の要が痛感されている。

原喜美助教授

現在主として関係している研究課題には次ぎのようなものがあるが、自己概念の研究以外はいずれも緒についたばかりである。

1) 女子教育の現代的課題

これは3名の国立教育研究所々員の方々と共同して行なっているもので、女子教育を教育社会学的視点から分析して、変動する社会における課題を究明していこうとするものである。特定の女子教育機関について、その卒業生、在學生を対象として、現在プリテストを実施している段階である。

2) 少年非行と学校の役割

都内の非行多発地域と考えられる地域の中学校をとりあげ、構造的機能的に学校の演ずる役割を分析していこうとするものである。現在このテーマを卒論として取り上げる3名の学生の協力を得て、本格的調査に取り掛かるところである。

3) 中学生の自己概念、価値意識に関する研究(日米比較研究)

これはミシガン州立大学において行なって来た研究であり、目下引き続き追加分析、フォローアップを重ねている。

教育社会学に関心をもち、専門分野として卒業論文に取りあげている学生は教育学科、社会科学科に7～8名いるが、彼らのテーマは、人間疎外の問題、女子の職業の問題、高等学校のスクール・カルチュアの問題、家族集団におけるソーシャリゼーションの問題、非行の問題など多方面にわたっている。なお、大学院創立以来、講師として教育社会学を担当してこられた東京教育大学の岡田謙教授は69年9月5日逝去された。先生の御功績を覚え、深く哀悼の意を表する。

E. 理科教育研究室

1968年度は、理科教育法に初めての博士課程の学生を迎えた。昨年度に引き続き、文部省より科学研究費として、原島鮮教授を代表者とする「高等学校物理の教材・教具の研究」に200万円、篠遠喜人客員教授を代表者とする「生物教育の基礎的研究」に200万円がそれぞれ交付された。理科教育研究室の活動は、国の内外において認められ、また、アジア16ヶ国から94名の参加者を迎えて「第2回アジア生物教育会議」を1968年8月11日より17日まで1週間、本学とアジア生物教育学会との共催で開催するなど、日本における理科教育のセンターとなりつつある。

以下に各教員の活動を報告する。

原島鮮教授

1) 1968年12月2日～6日 Eindhoven (オランダ) で開催された国際会議, The Education of Physicists for Work in Industry (International Union of Pure

and Applied Physics, 略称 IUPAP の Commission on Physics Education 主催) に出席し, “Role of Physicists in Japanese Industry” を提出した。創造性 (creativity) と柔軟性 (flexibility) について問題を提示して, 相当の反響を呼んだ。

2) 1969年9月11日~17日, Eger (ハンガリー) で開催予定の IUPAP, Commission on Physics Education 主催の国際会議, Education of Secondary School Physics Teachers のプログラム作製委員に指名された。

3) 「Nuffield 計画物理セミナー」の委員長として, 1968年7月29日より8月5日まで, 英国より Prof. Lewis を招いて, 東京と大阪で同セミナーを開催した。

4) コンピューター (IBM 1130, ICU) と映画 (8ミリ) を使う物理教育法 (大学・高校レベル) を研究した。力学については, 大体終了し, 現在, 量子力学を開拓中である。

ドナルド・C・ワース教授

1968年夏より1年間休暇で帰米中であった。

篠遠喜人客員教授

1) 日米科学会議「理数科教員の継続教育に関する日米合同会議」の日本代表として, 1968年7月16日より20日まで, ニューヨーク市郊外で開かれた会議に出席した。

2) アジア生物教育会議委員長として「第2回アジア生物教育会議」を1968年8月11日より17日まで ICU で開催した。

3) 日米科学会議「大学における生物教育」の日本側の責任者として, 1969年3月23日より28日までワシントン市で開かれた会議に出席した。

4) 細胞性粘菌の遺伝およびこの粘菌を用いて新しい生物実験開発の研究を行っている。

中山和彦講師

1) 「第2回アジア生物教育会議」の責任者として会議を開催した。アジア生物教育学会常任委員に再選された。

2) 「Nuffield 生物セミナー」委員長として, 同セミナーを ICU (5日間), 名古屋, 大阪, 松山, 広島, 福岡で開催した。

3) 日米科学会議「大学における生物教育」への日本代表として, 1969年3月23日より28日まで, ワシントン市で開かれた会議に出席した。会議終了後, 米国各地の諸大学および研究所などにおける理科教育および Computer Assisted Instruction の実情視察を行なった。

4) コンピューターの理科教育への導入, プログラム学習の理科教育への導入, 理科教育における評価, 教員再教育の諸問題など理科教育についての一般および大学における生物教育のあり方などについての研究を行っている。

2. 大学院教育学研究科修士論文 (1968年度卒業生)

1968年7月卒業生 11名

A. 教育哲学 (3名)

- 早川 福子 ヒュームの認識論に定められた影響の限界
(The Limitation of Influences defined by Hume's Epistemology)
- 西原文江 John Dewey の哲学における民主主義思想の研究
(A Study of Democratic Thought in John Dewey's Philosophy)
- 田中 力 プラトン『饗宴』におけるエロスの教育的意義
(The Educational Significance of Eros in Plato's *Symposium*)

B. 教育心理学 (1名)

- 田代千枝子 赤面恐怖症におけるロールシャッハ不安指標の研究
(A Study on Rorschach Anxiety Indices in Erythrophobia)

C. 視聴覚教育法 (3名)

- Karikoski, Pentti The Message of the Japan Lutheran Hour Radio Drama "Kono Hito o Miyo": A Content Analysis
(ルーテルアワー・ラジオドラマ“この人を見よ”における使信の内容分析)
- 小山 揚子 テレビと児童の生活に関する一考察
(A Study on Television and Life of Children)
- モーア, 岡本和子 A Study on TV Viewing Pattern and Social Relationship
(対人関係とテレビ視聴パターンに関する一研究)

D. 英語教育法 (3名)

- 大曾美恵子 A Study of Conditional Clauses
(条件節の一研究)
- 武内道子 Negation in English—A Study of Negative Particle NOT—
(英語の否定—否定素 not の一研究—)

- 牛島いづみ The Relative Clause Formation in English
(英語の関係詞節に対する制約)

E. 理科教育法 (1 名)

- 高 振 華 Applications of Audio-Visual and Computers in Undergraduate Physics Instruction
(大学物理教育における視聴覚教材および電子計算機の利用について)

1969年3月卒業者 16名

A. 教育哲学 (1 名)

- 浦田まり子 フレーベルの教育思想—教育の目的と方法の原理を中心として—
(A Study of Educational Thought of Friedrich Froebel—Especially on the Aim of Education and the Principles of Educational Method)

B. 教育心理学 (5 名)

- Kasemsomran, Arphorn A Survey of College Students' Attitude toward Counseling
(大学生のカウンセリングに対する態度の一研究)
- 岡田朋子 人物画テスト分析規準表に関する一考察
(A Study on a Check List for Draw-A-Person Test)
- Sánchez-Rivera, Peiró Juan Learning to Change through Love The Evolution of Rogers' Client-centered Therapy—An Internal Evaluation—
(愛による変化の認識 ロジャースのクライアント中心療法の展開—その内側からの評価—)
- 土屋静子 大学教育の教育評価に関する一考察
(A Study on Educational Evaluation of Higher Education)
- Williams, Stephen Nigel The Construction and Validation of an Intrinsic Program on the Logic of the English Paragraph for Japanese University and Junior College Students
(個別的プログラムの作成とその妥当性—日本の大学生・短大生のための英文パラグラフの論理に関する—)

C. 視聴覚教育法 (3 名)

- 生 田 孝 至 テレビ視聴の精神作業に及ぼす影響に関する研究
 (A Study of the Effect of Television on Mental
 Tasks)
- 鎌 形 清 喜 A Comparative Study of the Question Intonation
 Patterns between British and American English
 (英語と米語の質問イントネーションパターンに関する比
 較研究)
- 矢 ヶ 崎 庄 司 言語学習における記銘および把持の実験的研究
 (An Experimental Study on Memorization and
 Retention in Verbal Learning)

D. 英語教育法 (7 名)

- 鮎 沢 孝 子 Verb Complement Construction in English and in
 Japanese—A Study of *ni*-phrases—
 (英語および日本語における補語 —「に」フレーズを中心
 として—)
- 川 崎 潔 On the Aesthetic Approach to *Macbeth*
 (『マクベス』の審美的批評について)
- 真 鍋 セ ツ 子 Sprung Rhythm and Phonal Devices 'On the Poems
 of Gerald Manley Hopkins'
 (詩学における韻律と音韻修弁法 —G. M. ホプキンズの
 文体—)
- 小 川 邦 彦 A Study of Articleless Common Nouns in
 Shakespeare
 (シェイクスピアに於ける無冠詞普通名詞の研究)
- 沢 登 春 仁 A Contrastive Study of English and Japanese—With
 Special Reference to Lexical and Syntactical
 Discrepancies—
 (日英語比較研究—語彙及び構文のずれを中心に—)
- 鈴 野 富 美 子 Significance of Thought Rhythm in Teaching
 English (英語教育に於ける思考のリズムの意義)
- 常 木 清 Common Mistakes made by Japanese Students in
 Spoken and Written English—Toward a Contrastive
 Study on Japanese and English Rhetoric—
 (学生の英語に現われた誤りの分類と考察—日英語の比較
 修辞法を目ざして—)

3. 教育実習報告

1968年度は5月には三鷹市立第二中学および私立晃華学園の協力を得て、また9月から10月にかけては三鷹高校、豊多摩高校、杉並高校、三鷹市立第一、第三、第四、第五、武蔵野第一、第二、および小金井東の各中学の協力を得て行なわれた。その詳細は下記のとおりである。

1. 実習生総数 63（男子11，女子52）

2. 実習日程

5月6日～18日（三鷹二中）

5月20日～6月2日（晃華学園）

9月4日～17日（三鷹高校）

9月9日～21日（豊多摩高校、杉並高校、三鷹三中、四中、五中、武蔵野一中および小金井東中学）

9月30日～10月12日（三鷹一中，および武蔵野二中）

3. 実習配当校

教 科	実 習 校	三鷹高校	豊多摩高校	杉並高校	三鷹一中	三鷹二中	二鷹三中	三鷹四中	三鷹五中	武蔵野一中	武蔵野二中	小金井東中	晃華学園	合 計
		英 社 理 数	語 会 科 学	7	4	2	3		5	7	5	6	4	2
					3	3	1		3		1	1		12
					1						2			3
												1		1
	計	7	4	2	7	3	6	7	8	6	7	4	2	63

実習日程が受入校の都合等により広範囲に亘ったため、事務的手続きが複雑になった。教育実習の受講者63名中、69年3月実際に教育職員免許状を取得した者は55名であった。

69年3月卒業者の教員就職状況は以下のとおりである。

公立高校	男子1名（英語）
私立高校	男子3名（英語2，理科1）
公立中学校	女子1名（英語）
合計	5名

4. ひとのうごき

○新任・帰任・辞任

磯田一雄講師（教育課程・方法学）：1968年4月より着任。

都留春夫教授（教育心理学）：フィリピンの Ateneo de Manila 大学における日本研究講座主任および客員教授としての勤務を終え、1969年2月帰任。

黒田 瑛助手（教職課程非常勤講師および教務員、68年より教務課長）：69年3月辞任。

鈴木百合子助手（教育心理学）：69年3月、助手を辞任。

岩田みよ秘書：68年11月1日学務事務部より帰任。

○海外出張・休職

長清子教授（教育思想史）：68年7月、世界教会協議会第4回世界大会に出席のためスウェーデンに出張。その後、イギリスとアメリカの諸大学を訪問。

小林哲也助教授（比較教育学）：68年7月、ユネスコのハンブルク教育研究所長に任ぜられ、西ドイツに赴任のため、休職。

ドナルド・C・ワース教授（理科教育）：68年7月より一年間休暇のため帰米。ニューヨーク州立ストーニーブルック大学において研究を継続。

ベン・C・デューク助教授（比較教育学）：68年9月より一年間休暇。ロンドン大学において研究を継続。

原一雄助教授（教育心理学）：69年2月より、プエルト・リコ大学医学部客員準教授として「霊長類の視覚と脳半球接合神経および側頭葉の機能」の研究のため休職。